

自然教育園の動物目録の追録と 稀種動物の目撃記録 (2)

久 居 宣 夫*

Notes on Newly or Rarely Observed
Animal Species in the Institute for
Nature Study (2)

Nobuo Hisai*

は じ め に

今回は、1987年3月以降新たに生息が確認されたり、目撃された種あるいは前報（久居，1987）までに記録もれした種について報告する。また、稀種の目撃記録については、今後の変化を考慮し、動植物目録（国立科学博物館附属自然教育園，1984a）中でr：“稀”，または(r)：“古い記録はあるが，現在未確認の種”と記してある種を全て対象とした。ただし鳥類については千羽晋示氏が別稿で詳述する予定なので，ここでは簡単な記録のみにとどめる。

なお，学名および和名などは上述の目録に準拠した。また，日付は目撃あるいは捕獲した西暦年月日を（日付のないものはふつうに見られることを示す），カッコ内は目撃者あるいは捕獲者名を示し，日付のみの場合は筆者の記録によることを示す。なお，捕獲した動物は標本にして保存されている。

本報をまとめるにあたり，種々のご教示をいただき，また快く同定くださった東洋大学教授の大野正男氏，鳥類などの貴重な記録を提供くださった日本野鳥の会の守田洋氏をはじめ，日ごろより情報を提供していただいた方々に感謝の意を表する次第である。

1. 追 録

Arthropoda 節足動物門

Arachnida 蛛形綱

Cyclosa argenteoalba Bös. et Str. ギンメッキゴミグモ（真正クモ目 コガネグモ科）1988.7.22
食草園（図1参照）のカラタチに網を張っていた個体を捕獲。ほぼ日本全土に分布する，雌の体長が6～7mmの小さなクモである。

* 国立科学博物館附属自然教育園，Institute for Nature Study, National Science Museum

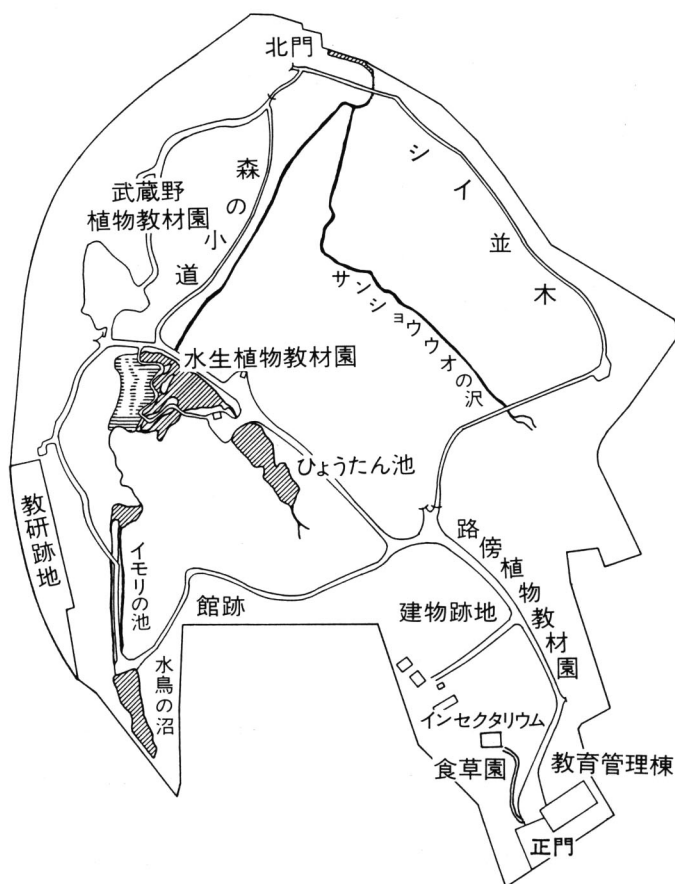


図1. 自然教育園概略図

Philodromus auricomus L. Koch キンイロエビグモ (ハラジロ型) (真正クモ目 エビグモ科)
1988.6.7 (図2)

本種も食草園で捕獲した。分布はほぼ日本全土。本種を含むエビグモ属は従来カニグモ属などとともにカニグモ科として扱われており、動植物目録でもカニグモ科に入れてある。しかし、最近ではシャコグモ属・ヤドカリグモ属とともに分離され、エビグモ科として独立した科として扱われている (例えば、八木沼, 1986)。

Crustacea 甲殻綱

Palaemon (Palaemon) paucidens De Haan スジエビ (十脚目 テナガエビ科)

ひょうたん池・水生植物教材園・サンショウウオの沢など園内の水系に広く分布している。体長は50mmくらいになる。

国内での分布は北海道から九州・屋久島・種子島と広い。ふつう淡水性であるが、汽水にも生息する。園内に生息するエビ類としては、このほか *Paratya compressa compressa* De Haan ヌマエビとその

近似亜種 *P. compressa improvisa* Kemp ヌカエビの2種が考えられていた。しかし、三宅 (1982) によれば、ヌマエビは南方系で、国内では新潟県 (日本海側) と愛知県 (太平洋側) 以南に分布するという。したがって、本園にはヌマエビが分布しないことになる。1989.1.24にひょうたん池より20個体エビを捕獲し調べたところ、全てスジエビであったが、ヌカエビは北方系で村上 (新潟県) と河和 (知多半島) を結ぶ線以东と以北の本州に生息するという (久保, 1973) から、ヌカエビの分布は可能性がある。

Insecta 昆虫綱

Phaneroptera nigro-antennata Brunner アシグロツユムシ (直翅目 キリギリス科) 1988. 9. 9

自然観察会「鳴く虫」の下調査のおり、サンショウウオの沢の木道で目撃。園内には同属の *P. falcata* Poda ツユムシや *Ducetia japonica* Thunberg セスジツユムシが生息するが、この2種ほどは個体数は多くない。

北海道・本州・四国などに分布し、関西以西では年2化で、6～7月と8～11月に成虫が出現する。

Melanitis phedima Cramer クロコノマチョウ (鱗翅目 ジャノメチョウ科) 1987.10.1 (矢野亮氏)

正門付近で捕獲された。本種はこのほか、正門からインセクトariumに通じる道で数回目撃されており、食餌植物のススキ・アブラススキ・ヨシ・チヂミザサなどが豊富に生育していることから、園内でも繁殖している可能性がある。

本種はインド・スリランカ・インドシナ・台湾などに生息し、日本が分布の北限になっている。本種は国内でもさらに分布の拡大が進行しており、採集記録の北限は山形県上山市である (福田他, 1984b)。東京では1983年に五日市町で蛹が確認され、町田市や板橋区でも成虫が記録され、1986年には世田谷区でも新鮮な個体が記録されている (福田, 1988)。

各地とも秋型成虫で越冬し、年2～3回発生する。

M. leda Linné ウスイロコノマチョウ (鱗翅目 ジャノメチョウ科) 1987. 8. 27 (萩原信介氏)

武蔵野植物教材園で捕獲。

本種の分布域は広く、西はアフリカ・マダガスカルから、東はオーストラリア北部からさらにはサモア・タヒチに至るという (福田他, 1984b)。国内では南西諸島から北海道まで記録はあるが、定着しているのは南西諸島であり、九州から北の地域で観察されるのはいわゆる迷チョウと呼ばれる移動個体か、それに由来する発生個体がほとんどであろうといわれている (福田他, 1984b)。

Rhaphitropis guttifer Sharp コモンヒメヒゲナガゾウムシ (鞘翅目 ヒゲナガゾウムシ科) 1987.6.28 (大野正男氏)

館跡付近で捕獲。体長3～4mmの黒ないし黒褐色の小型のゾウムシで、本州・九州に分布している。

Vertebrata 脊椎動物門

Reptilia 爬虫綱

Chrysemys scripta elegans Wied ミシシッピーアカミミガメ (カメ目 ヌマガメ科)

2～3年前より、ひょうたん池でイシガメとクサガメに混ざって、池内の倒木上でいわゆる甲羅干しをしている個体が目撃されていた。最近では水生植物教材園にも本種が見られ、この数年間に入園者によって持ち込まれて放逐されたものであろう (図3)。

本種はアメリカ合衆国南部が原産であり、日本にはペットとして輸入されたものである。子ガメの背甲は緑色で、現在ミドリガメと呼ばれる大部分は本種であるという(原, 1979)。これらのペットとして飼育されていたものが、捨てられたり、逃げだしたりして各地で野生化している(千石, 1979; 中村, 1981)。

本種は1988年より園内での繁殖が確認され、1988年7月28日、食草園で産卵中の背甲長20cmの雌が捕獲された(図4)。産卵数は16卵で、大きさは平均で長径31mm、短径21mmの楕円形である。このほか、武蔵野植物教材園の園路にも産卵しているのが守田洋氏によって観察され、ここには8卵が産卵されていた。

1988年7月30日にも水生植物教材園で背甲長22cmの個体が捕獲されたが、これらのほか、水生植物教材園に2個体、ひょうたん池に3個体の計5個体がまだ生息している。

本種が性成熟するのは雄が2~5才、腹甲長約10cm、雌は3~8才、腹甲長15~20cmである(原, 1974)。本園に生息する個体はいずれも背甲長が10cm以上もあり、今後も成長を続け、いずれは繁殖活動を行うものと考えられる。本種は背甲長が28cmと *Mauremys japonica* Temminck et Schlegel イシガメ(背甲長18cm)や *Chinemys reevesii* Gray クサガメ(同25cm)よりも大きくなり、これらよりも寒さや水質汚濁にも強く(原, 1979; 中村, 1981)、また性格も荒いので、本種の繁殖が在来種の2種のカメに及ぼす影響が懸念される。

Aves 鳥綱

Porzana fusca erythrothorax Temminck et Schlegel ヒクイナ(ツル目 クイナ科) 1987.6.18(千羽晋示氏)

夜、ホテルの個体数調査のおり、ひょうたん池の奥にいる本種を目撃。

Sphenurus sieboldii sieboldii Temminck アオバト(ハト目 ハト科) 1987.10.3(守田洋氏)

三叉路付近の木に止まっている個体を目撃。

Tauraco leucotis Rüppell ホオジロエボシドリ(ホトトギス目 エボシドリ科) 1987.10.21~1988.6月(守田洋氏)

イモリの池の東側のコナラ林で長期にわたって観察された。飼い鳥のかごぬけの可能性が大きい。

Bombycilla japonica Siebold ヒレンジャク(スズメ目 レンジャク科) 1988.4.3(坂本直樹氏)
武蔵野植物教材園で目撃。

Sitta europaea amurensis Swinhoe ゴジュウカラ(スズメ目 ゴジュウカラ科) 1987.10.11(内田俊夫氏)

森の小道で数日間滞在。

Parus venustulus Swinhoe キバラガラ(スズメ目 シジュウカラ科) 1988.7.1~(守田洋氏)

水生植物教材園付近で観察された。飼い鳥のかごぬけの可能性はある。

2. 稀種の日撃記録

(1) 昆虫類

Ceriagrion melanurum Selys キイトンボ(蜻蛉目 イトトンボ科) 1986.7.29

水生植物教材園のアサザを植栽してある付近で目撃。

本種は頼 (1978) によると、1974～1977年までの記録では普通 (多) となっている。しかし、その後は個体数が激減し、筆者は1987年以降は目撃していない。ただし、守田洋氏によると、1987年に同所で観察したという。1988年は目撃記録が全くない。

本種は平地の挺水植物の多い池沼に生息し、青森県から屋久島まで、離島も含めて広く分布するが、山梨県と伊豆諸島からの記録は現在のところないという (浜田・井上, 1985; 石田他, 1988)。

C. nipponicum Asahina ペニイトトンボ (蜻蛉目 イトトンボ科) 1986.8.5

武蔵野植物教材園の人工池で2個体目撃。

本種も以前はふつうに観察されたイトトンボの一種であったと考えられるが、キイトトンボと同様最近急激に発生が減少したトンボといえる。本園では、武蔵野植物教材園にある二つの人工池でのみ繁殖しているが、1987年以降は目撃されていない。

本種も平地の挺水植物が多い池沼に生息する。また、ペニイトトンボの産地にはキイトトンボも混生することが多い。しかし、キイトトンボの産地に必ずしも本種が生息するとはいえないという。国内では宮城県から九州まで分布しているが、産地はかなり局地的である (浜田・井上, 1985)。

頼先生からの私信では、1982年にはキイトトンボ、ペニイトトンボとも記録されず、これらの減少がすでにこのころから生じていたとも考えられる。

これらのイトトンボと同様に、かつては多く生息していたものの、最近激減したトンボに *Mnais pruinosa* Selys カワトンボ (本園に生息するのはおそらく *M. pruinosa pruinosa* Selys ニシカワトンボと考えられる) がいる。カワトンボは都区内では本園以外に生息していない (頼, 1978) と考えられている貴重なトンボであるが、本種も1988年の目撃記録はない。

Cercion sieboldii Selys オオイトトンボ (蜻蛉目 イトトンボ科)

1988.7.28 水生植物教材園で目撃。

本種も平地の挺水植物の多い池沼に生息する。日本の特産種で、日本に広く分布するが、東北地方以北および九州南部では産地が比較的局地的であり、また東海地方でも少ないという (石田他, 1988)。

Epophthalmia elegans Brauer オオヤマトンボ (蜻蛉目 ヤマトンボ科)

1987.6.26 サンショウウオの沢の湿地で目撃。本種は北海道から南西諸島まで広く分布し、平地や丘陵地の池沼や湖に生息する (浜田・井上, 1985)。オオヤマトンボは、日本に産するトンボ上科に属するトンボではもっとも大型である。

Cryptotympana facialis facialis Walker クマゼミ (半翅目 セミ科) 1986.8.29, 同9.4, 1987.8.13, 同8.24 (矢野亮氏)

1986年は食草園で、1987年は正門付近で鳴いている声を聞く。鳴く時刻は午前中に限られるという (宮武, 1977)。分布は本州 (東京以西)・四国・九州などであり、東京での発生記録は代々木公園で1979年から確認されている (橋本, 1980, 1982, 1986)。本園での発生は確認されておらず、おそらく神奈川県以西か千葉県南部で発生した個体が飛翔してきたものであろう。本種の鳴き声は毎年1～2回聞かれる。

Parachauliodes japonicus MacLachlan ヤマトクロスジヘビトンボ (脈翅目 ヘビトンボ科) 1988.5.19 (矢野亮氏)

建物跡地で成虫を捕獲。幼虫は水生で、園内を流れる水路に生息しているものと考えられる。分布は本州・四国・九州などで、成虫は5月下旬～7月に出現する。

Papilio helenus Linné モンキアゲハ (鱗翅目 アゲハチョウ科) 1984.8.26, 1986.9.1 (矢野亮氏), 1988.9.7

本種は毎年数回, 晩夏〜初秋に目撃される。1988.9.7の記録では食草園のカラスザンショウに産卵し, 飛び去っていった。卵あるいは幼虫のその後のようすは不明。

本種の分布の北限は日本海側が秋田県男鹿市, 太平洋側が宮城県金華山で, 食餌植物であるカラスザンショウの分布の北限にほぼ一致するが, 発生地はもう少し南になる。そして, 本州から沖縄まで, 野外で食樹としてもっとも利用されているのがカラスザンショウである (福田他, 1982)。

Anthocharis scolymus Butler ツマキチョウ (鱗翅目 シロチョウ科) 1984.5.10 (矢野亮氏), 同 5.11, 1987.4.5, 同 4.8, 同 4.15, 1988.4.12, 同 4.15

本種は一度絶滅したと考えられていたものが再び発生したもので, 前報 (久居, 1987) ではその初見を 1986.4.24 と記録したが, これは誤りで, 上記のように 1984.5.10 を初見と訂正する。

本種も 1984 年以降, 毎年春出現し, 園内で繁殖しているものと考えられる。園内では食草園や建物跡地の草原で多く目撃されるが, このほか水鳥の沼や水生植物教材園で目撃された例もある。食餌植物は食草園や建物跡地に生育するハナダイコンと考えられる。水鳥の沼や水生植物教材園を飛翔していた個体は, 近くの教研跡地 (旧国立教育研究所) にやはりハナダイコンが生育するので, ここで発生した個体の可能性もある。園内での食餌植物にはタネツケバナやイヌガラシなどがあげられるが, 本種はハナダイコンに依存している部分が多いと考えられる。

福田 (1988) によれば, 東京都世田谷区でも 1970 年ごろまで比較的多く見られたが, その後 1977〜1980 年には全く目撃されなくなったものの, 1985 年に突然発生し, それ以降毎年繁殖をくり返している。そして, 食餌植物はハナダイコンのほかセイヨウカラシナ・コマツナ・キャベツであるという。

Narathura japonica Murray ムラサキシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) 1984.12.2 (矢野亮氏), 1988.10.19, 同 10.26

1988 年の記録はいずれも教研跡地からのもので, 2 回ともセイタカアワダチソウで吸蜜していた個体を目撃。10月26日に記録のため捕獲。

本種は本州以南の常緑広葉樹林に広く分布するが, 近年発生が減少しているシジミチョウの一種である。世田谷区でも稀に見られたが, 1970 年ごろから全く記録されなくなった。しかし, 1985 年の夏から再び採集記録が報告されはじめた (福田, 1988)。

本種は関東地方の山地では 6 月中旬〜7 月, 8〜10 月の 2 回発生し, 10 月ごろ羽化した個体が成虫で越冬する。越冬に入る前に山地から移動し, 草地や耕作地に出現してサザンカやビワ・セイタカアワダチソウなどに訪花することが知られている (福田他, 1984a)

園内でムラサキシジミが見られるのはほとんど秋〜初冬に限られるので, おそらく越冬地として本園を利用する個体が目撃されるのであろう。

Antigius attilia Bremer ミズイロオナガシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) 1984.6.12 (矢野亮氏), 同 6.14, 同 6.17, 同 8.25, 1985.6.16

本種は食草園の周辺でよく見られる。一時ほとんど目撃されなかったが, 最近是比较的によく見られる。福田ら (1984a) によれば, 本種は北海道〜九州に分布し, 平地の雑木林はもとより“人工的な二次林や都市地域内に取り残された小規模な雑木林にも生息する”という。ミズイロオナガシジミにとって本園はまさにこのような環境であり, ここで発生をくり返しているゼフィルススの貴重な一種といえる。本園

での食餌植物は主としてコナラであろう。

Rapala arata Bremer トラフシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) 1984.6.28, 1985.6.16 (矢野亮氏)
1984年は水生植物教材園のイヌヌマトラノオで吸蜜している新鮮な個体を目撃。

本種は北海道～九州に広く分布し、成虫はふつう 4 月中旬～5 月下旬, 6 月中旬～8 月の年 2 回出現する。

幼虫はかなり広食性で、記録されている植物は科名であげると、マメ科・ユキノシタ科・バラ科・ツツジ科・ハイノキ科・クロウメモドキ科・ブナ科・ミズキ科・リョウブ科・トチノキ科・ミツバウツギ科となっている (福田他, 1984a)。これらのうちマメ科のフジ・クズ・クララなどで幼虫がよく成育することが知られているから、本園にもふつうに生育するこれらの植物で繁殖している可能性も十分にある。

Curetis acuta Moore ウラギンシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) 1986.10.9, 1988.9.2, 同10.26
本種は食草園・水生植物教材園・教研跡地など園内各所で目撃される。記録そのものは少ないが毎年秋には必ず目撃される。

本種は年 2～3 回発生し、成虫で越冬する。越冬場所はシラカシ・ヒサカキ・ツバキ・スダジイ・クスノキなどの常緑広葉樹の葉裏が多い (福田他, 1984a)。幼虫の食餌植物はマメ科のフジ・ジャケツイバラ・クララ・クズなどであり、食草と越冬場所から考えると本園で繁殖できる条件は十分にある。しかし、園内では秋以外の目撃が皆無に近いこと、越冬のために移動する個体がいるらしいこと (福田他, 1984a) などから、園内での発生の可能性も否定できないが、むしろ、周辺地域で発生した個体が越冬のため移動してきた可能性の方が大きいと考えられる。

なお、福田 (1988) によれば、本種は世田谷区では昭和初期には稀で、昭和40年代後半になってから個体数が多くなったという。本園では1952年発行の動物目録 (文部省国立自然教育園, 1952) にすでに本種が登載されているので、かなり以前から目撃されていたことになる。

Libythea celtis Fuessly テングチョウ (鱗翅目 テングチョウ科) 1985.4.3, 同 4.14, 同 4.26, 同 6.16 (矢野亮氏), 1986.3.26, 1987.5.30

本種は毎年春～初夏に園内の路上で目撃される。

本種は北海道～九州・南西諸島など広く分布し、年 1 回発生し、成虫で越冬する。食餌植物はエノキ・エゾエノキで、園内にふつうに生育するエノキで発生をくり返していると考えられる。

Parantica sita Kollar アサギマダラ (鱗翅目 マダラチョウ科) 1986.8.23, 1987.9.24, 1988.11.13 (以上矢野亮氏), 1986.8.24, 同 9.10, 同10.4, 1988.5.31

本種も毎年数個体目撃されるチョウである。園内では路傍・建物跡地などでゆるやかに飛翔する個体を目撃する。1988年の記録は、武蔵野植物教材園のウツギで吸蜜していたまだかなり新鮮な個体である。

本種も北海道～沖縄県まで広く分布するが、幼虫が越冬できる北限は関東地方である。食餌植物はガガイモ科のキジョランなどであり、同科に属する植物としては本園には、イケマ・コバノカモメツルがわずかに生育することが知られているにすぎない。これらのうち、コバノカモメツルが食草として利用された記録も散見する (福田他, 1982) が、本園では、食草として利用できるほど生育しているとは考えられない。したがって、本種の移動範囲が大きいことが最近明らかになりつつあるので、本種も周辺地域で発生し、移動してきた個体が目撃されると考えられる。

Argynnis paphia Linné ミドリヒョウモン (鱗翅目 タテハチョウ科) 1984.9.15 (2 個体), 同 9.20,

同 9.26, 1987.9.18 (矢野亮氏, 2 個体), 同 9.22, 1988.6.28 (3 個体)

本種も食草園・建物跡地・水生植物教材園などで毎年よく目撃される。本種は秋に都市部に飛来してくるので、山地からの移動個体とも考えられる(福田他, 1983, 福田, 1988)。本園での目撃記録も例年 9 月に集中しており、移動個体とも考えられる。しかし、1988年には夏(6.28)に新鮮な個体が 3 個体同時に水生植物教材園のイヌマトラノオで吸蜜しているのが観察された。幼虫の食餌植物はスミレ類で、特にタチツボスミレを好むことが知られている。したがって本園に多く生育しているタチツボスミレを食草にして繁殖している可能性も十分にある。

Cynthia cardui Linné ヒメアカタテハ(鱗翅目 タテハチョウ科) 1984.6.24, 同 6.28

記録されているものは少ないが、本種も毎年目撃されるチョウの一種である。夏は水生植物教材園のイヌマトラノオで吸蜜している姿をよく見かける。また、10~11月ごろは路傍のタイアザミに飛来する。

本種は汎世界的なチョウとして知られ、移住性も大きい。国内では北海道~九州および離島や南西諸島に広く分布する。

“本種には決まった越冬態がなく、それぞれの地域にもっとも適した発育段階で越冬していると思われる”(福田他, 1983)とされ、関東平野の南部では非休眠の若齢幼虫が、食餌植物であるハハコグサやヨモギなどを摂食しながらゆっくりと成長し、翌春羽化する(松井・松井, 1981, 1982)。また松井・松井(1983)は幼虫越冬可能地域を、1月の平均気温が3°Cのラインと推定している。もしこの推定が正しければ、本園の1月の平均は1973年と1974年の場合、それぞれ4.8°C, 3.6°Cである(国立科学博物館附属自然教育園, 1984b)から、温度的にも、あるいは食餌植物の冬季の生育状況からも、本園における幼虫越冬の可能性もある。

Daimio tethys Ménétrière ダイミョウセセリ(鱗翅目 セセリチョウ科) 1984.6.6, 1986.5.11, 同 5.15, 同 5.22, 同 6.5, 同 7.29, 同 9.10

本園では路傍植物教材園や建物跡地などで毎年目撃される。1986.6.5の記録は水生植物教材園そばのイボタノキで吸蜜している個体を目撃。食餌植物はヤマノイモやオニドコロなどである。本園でも園路の路傍や食草園に生育するこれらの植物に特徴ある幼虫の巣が観察されており、園内で発生をくり返していることが確認されている。

Nicrophorus concolor Kraatz クロシデムシ(鞘翅目 シデムシ科) 1987.8.28 (矢野亮氏)

本種は、1987.8.28~29に本園で案内・指導した高校生の特別団体(東京生物クラブ)を対象に実施したベート・トラップ調査の際に1個体のみ捕獲されたものである。

本種は1952年の動物目録(前掲)に記録されているものの、その後10数十年以上もの間ベート・トラップで捕獲されず、絶滅したと考えられていたシデムシである。本園にはごくふつうに生息するオオヒラタシデムシ・コクロシデムシを加えて現在3種のシデムシ類の生息が確認されたことになる。

Paralichas pectinatus Kiesenwetter ヒゲナガハナノミ(鞘翅目 ナガハナノミ科) 1988.5.19 (原正樹氏), 同 5.26 (林禎久氏)

本種はいずれも園内の昆虫調査のおりに目撃・採集されたものである。5.19はイモリの池で、5.26はサンショウウオの沢で記録されたものである。特にサンショウウオの沢の記録は、一度に20個体以上も目撃され、しかも、本園での新産地である。それまでの記録はイモリの池でのみ知られている。

本種を含むナガハナノミ類の幼虫は、その大部分が水生で、山地清流の瀬や落葉の推積したところに

多く生息するという(佐藤, 1985)。したがって、本園ではイモリの池よりも、水質のよいサンショウウオの沢の方が幼虫の生息地として適当と考えられる。しかし、この流れも含めて、本園での幼虫はまだ未記録である。

(2) そ の 他

Gekko japonicus Duméril et Bibron ニホンヤモリ (トカゲ目 ヤモリ科) 1987.8.27

管理棟内の車庫のコンクリート壁面についている幼体を目撃。

Elaphe quadrivirgata Boie シマヘビ (トカゲ目 ナミヘビ科) 1988.7.1

水生植物教材園一帯を行動域にもつ個体を目撃。

本種は特に稀種というわけではないが、本園では *E. climacophora* Boie アオダイショウと *Phabdophis tigrinus* Boie ヤマカガシにくらべ個体数がかなり少ない。

本種は日本の固有種で、北海道～九州に分布し、平地にも山地にもふつうに生息する。おもな食物は両生類と爬虫類である。なお、本園では、以前アオダイショウが多く、ヤマカガシが少なかった。しかし、この数年で逆転し、ヤマカガシの方が多くなった。この理由は明らかではないが、おもな食物はアオダイショウが鳥類と哺乳類であるのに対して、ヤマカガシはカエルと小魚類であり(千石, 1979)、この食性のちがいによる園内での餌動物の得やすさに関係しているのかもしれない。

Podiceps ruficollis poggei Reichenow カイツブリ (カイツブリ目 カイツブリ科) 1988.7.22～1988.9.2

本種は水生植物教材園で繁殖。

Butorides striatus amurensis Schrenck ササゴイ (コウノトリ目 サギ科) 1987.9.7, 1988.7.15 (いずれも守田洋氏)

水鳥の沼の奥にいる個体を目撃。

Sterna albifrons sinensis Gmelin コアジサシ (チドリ目 カモメ科) 1986.6.18 (守田洋氏)

水生植物教材園で目撃。

Cuculus saturatus horsfieldi Moore ツツドリ (ホトトギス目 ホトトギス科) 1988.5.12 (矢野亮氏)

水生植物教材園付近で鳴き声を聞く。

C. poliocephalus poliocephalus Latham ホトトギス (ホトトギス目 ホトトギス科) 1985.5.22, 1986.5.13, 同 5.23, 1988.5.25

館跡、三叉路などでいずれも鳴き声を聞く。

Ninox scutulata japonica Temminck et Schlegel アオバズク (フクロウ目 フクロウ科) 1988.9.9 (千羽・矢野・菅原各氏・筆者)

自然観察会「鳴く虫」の下調査のおり鳴き声を聞く。

Dendrocopos kizuki seebohmi Hargitt コゲラ (キツツキ目 キツツキ科) 1988.3.15, 同 7.28 (守田洋氏とともに)

ひょうたん池そばの園路、武蔵野植物教材園で姿と鳴き声を確認。

D. major hondoensis Kuroda アカゲラ (キツツキ目 キツツキ科) 1986.10.28～1987.2月 (守田洋氏)

森の小道の奥で見つけ、その後翌年2月まで観察されたという。

前報(久居, 1987)の追録中のオオアカゲラは、目撃時期および場所から考えて本個体の可能性がきわめて高く、このオオアカゲラを目撃記録は再検討を要する。

Alcedo atthis bengalensis Gmelin カワセミ (ブッポウソウ目 カワセミ科) 1987.9.20 (守田洋氏), 1988.4.9~8.23, 同11.11

本種は1988年に建物跡地に掘られた穴の横壁で2回繁殖した。また、11.11には水生植物教材園に飛来しているのを目撃。

Ficedula mugimaki Temminck ムギマキ (スズメ目 ヒタキ科) 1987.10.25 (坂本直樹氏)

森の小道の奥で目撃。

Carduelis spinus Linné マヒワ (スズメ目 アトリ科) 1987.4.23 (守田洋氏)

水生植物教材園の東側の岸辺の林縁で当日のみ目撃。

引用文献

- 福田晴夫他8名. 1982. 原色日本蝶類生態図鑑 (I). 277pp. 保育社, 大阪.
———. 1983. 原色日本蝶類生態図鑑 (II). 325pp. 保育社, 大阪.
———. 1984a. 原色日本蝶類生態図鑑 (III). 373pp. 保育社, 大阪.
———. 1984b. 原色日本蝶類生態図鑑 (IV). 373pp. 保育社, 大阪.
福田晴男. 1988. 移りゆく東京のチョウ. 「都市の昆虫誌」(長谷川仁編), 135-178. 思索社, 東京.
浜田康・井上清. 1985. 日本産トンボ大図鑑. Vol.2: 129-291. 講談社, 東京.
原幸治. 1974. アメリカヌマガメのなかま(1). どうぶつと動物園, 26(1): 372-375.
———. 1979. 不忍池のカメ. どうぶつと動物園, 31(9): 298-301.
久居宣夫. 1987. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(1). 自然教育園報告, 18: 41-44.
橋本治二. 1980. 代々木公園のクマゼミ'80. Cicada, 2(2): 30.
———. 1982. 東京のクマゼミ'82年. Cicada, 4(2): 31.
———. 1986. 代々木小公園のクマゼミの脱皮殻. Cicada, 6(4): 50.
石田昇三・石田勝義・小島圭三・杉村光俊. 1988. 日本産トンボ幼虫・成虫検索図説. 72pls+105figs+140pp. 東海大学出版会, 東京.
国立科学博物館附属自然教育園. 1984a. 国立科学博物館附属自然教育園動植物目録. 118pp.
———. 1984b. 自然教育園の気象(気温・湿度)1973・1974年度(自然教育園基礎資料第25号), 27pp.
久保伊津男. 1973. エビ類(遊泳亜目Natantia). 「川村多実二原著 日本淡水生物学」(上野益三編), 489-495. 図鑑の北隆館, 東京.
松井英子・松井安俊. 1981. ヒメアカタテハの非休眠越冬. 昆虫と自然, 16(10): 23-26.
———. 1982. 南関東におけるヒメアカタテハ幼虫の越冬例. 月刊むし, 136: 18-19.
松井安俊・松井英子. 1983. 日本列島におけるヒメアカタテハの移動. 昆虫と自然, 18(2): 7-13.
三宅貞祥. 1982. 原色日本大型甲殻類図鑑. 261pp. 保育社, 大阪.
宮武頼夫. 1977. 半翅目(同翅亜目). 「原色日本昆虫図鑑(下)」全改訂新版.(伊藤修四郎他編), 136

-174. 保育社, 大阪.

文部省国立自然教育園. 1952. 国立自然教育園動物目録, 第1集昆虫綱. 42pp.

中村一恵. 1981. ミシシッピーアカミミガメの野生化について. 神奈川自然誌資料, 2: 41-42.

頼惟勤. 1978. 自然教育園の蜻蛉の目撃記録. 自然教育園報告, 8: 61-71.

佐藤正孝. 1985. 鞘翅目(甲虫目). 「日本産水生昆虫検索図説」(川合禎次編), 227-260. 東海大学出版会, 東京.

千石正一編. 1979. 原色両生・爬虫類. 206pp. 家の光協会, 東京.

八木沼健夫. 1986. 原色日本クモ類図鑑. 305pp. 保育社, 大阪.

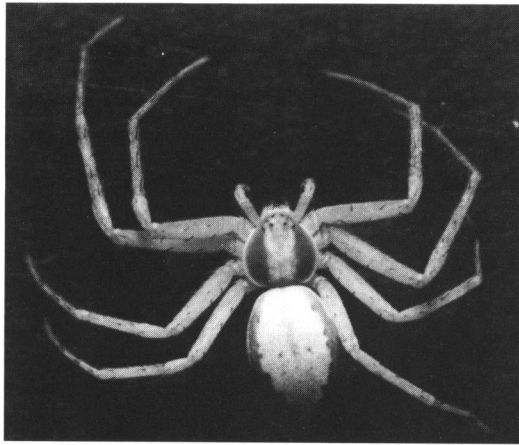


図 2. キンイロエビグモ

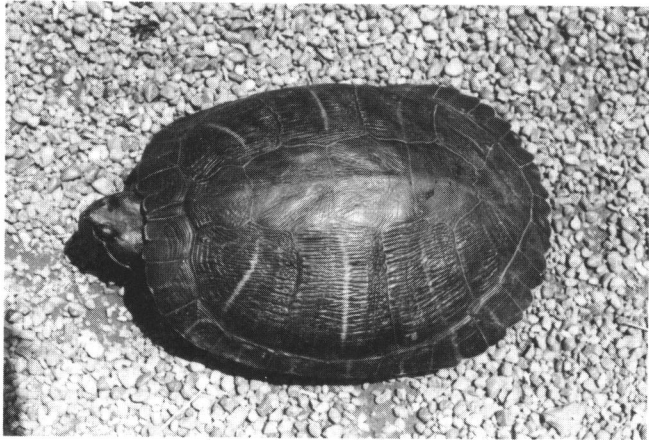


図 3. 捕獲されたミシシッピーアカミミガメ



図 4. 食草園で産卵中のミシシッピーアカミミガメ

「動植物目録」の正誤および訂正について

本園で1984年に発行した「国立科学博物館附属自然教育園動植物目録」中の訂正は、発行前に明らかとなった箇所については正誤表にまとめ目録に添付して配布した。しかし、その後動物目録中に新たな訂正箇所が見つかった。それらについてここにまとめて訂正する。なお、これら以外にもまだ多くの訂正箇所があると思われるので、お気づきの点をご教示いただければ幸いである。(久居宣夫)

正 誤 表

頁	行	誤	訂 正
52	上10	BIVALIA	BIVALVIA
57	下 4	CRUSTACEAE	CRUSTACEA
58	上 6	<i>Jesogammarus</i> sp. ヨコエビ科 の一種 本種は森野浩氏 (1985) によって新種の記載がされたものである*	<i>Jesogammarus spinopalpus</i> MORINO アゴトゲヨコエビ この種は トゲイシムカデ科 に入 れる
60	上11	<i>Anopsobius japonicus</i> MURA- KAWA メクライシムカデ	<i>Baculentulus morikawai</i>
60	下12	<i>Berberentulus morikawai</i>	<i>Baculentulus morikawai</i>
111	上 4	<i>Chinemys reevesi</i>	<i>Chinemys reevesii</i>
13	上 3	RALLIDAE クイナ科の上に	GRUIFORMES ツル目を入れる
113	上11	<i>Sterna albifrons sinensis</i>	<i>Sterna albifrons sinensis</i>

動植物目録に添付の正誤表中 2 頁目の下から 5 行目の**ARACHINIDA**を**ARACHNIDA**と訂正する。

* Morino, H. 1985. Revisional studies on *Jesogammarus-Annanogammarus* group (Amphipoda: Gammaroidea) with descriptions of four new species from Japan. Publ. Itako Hydrobiol. Stn., 2(1): 9-55.